



その10

弥生く古墳時代の木質資源の地域間流通

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター 主任専門員 樋上昇

縄文時代中期以降、日本列島では定住化が進み、弥生時代には水稻耕作が開始される。このような生活様式の変化に伴い、列島に自生する樹木は木の性質に応じて様々な生活物資＝木製品へと姿を変えられた。

弥生時代、ほとんどの集落では周辺に自生する樹木で日常的に使う木製品を賄えたが、なかには周辺に有用な樹木が自生していない地域もあった。このような地域に住む人々は、山間部く丘陵近くの集落と繋がりを持ち、主に河川を利用して必要な木質資源を入手した。

古墳時代には使用樹種の大半が針葉樹となり、山間部で製材・加工した木質資源を沖積低地へ運ぶための大規模な流通網が整備された。

弥生人が好んで用いた樹種

図1は愛知県清須市・名古屋市区に所在する朝日遺跡から出土した弥生時代中期から古墳時代中期にかけての木製品を用途ごとに分け、それぞれに使用された樹種の割合を表したものである(1)。

樹種と木製品の用途との関連性については、本特集その6「遺跡出土の生活用具で探る木材

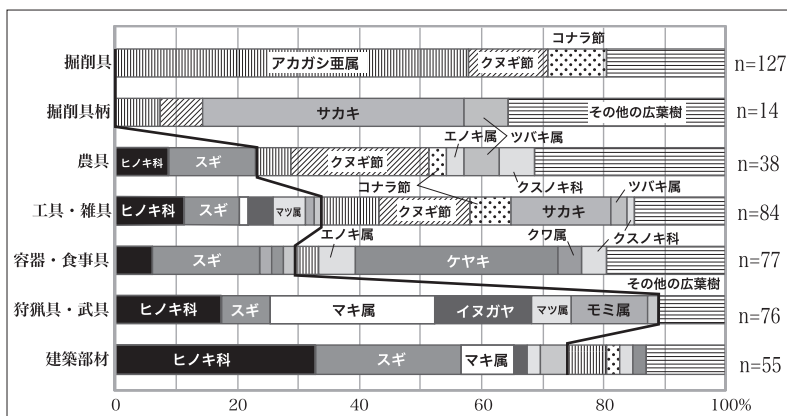


図1 愛知県 朝日遺跡出土木製品の機種別 樹種組成グラフ (文献1を改変、グラフ中央の太線より左が針葉樹で右が広葉樹を示す 図4・5も同様)

利用」(村上由美子)に詳しく記されているので詳細は省くが、図1では上のほうの器種(掘削具、掘削具柄、農具、工具・雑具、容器・食事具)は広葉樹の使用比率が高く、下の狩猟具・武具や建築部材は針葉樹が大半を占める。

弥生時代集落の立地と木質資源の流通

特に鍬や鋤などの掘削具には重くて堅いアカガシ亜属・クヌギ節・コナラ節を多く用いる。

弥生時代の人々は多くの場合、前述のような木材、なかでも身幅が20センチ以上の鍬を「8分の1分割材」から柱目(図2を参照)で採るために、直径60センチ以上のアカガシ亜属大径木を入

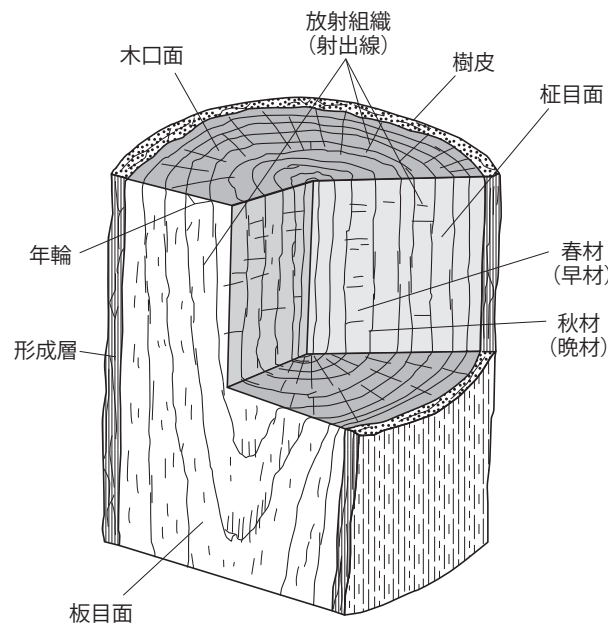


図2 柱目と板目(文献1より引用)



図3 濃尾平野周辺地域における木材生産地と消費地の関係 (S=1:500,000 地図はスーパー地形を利用)

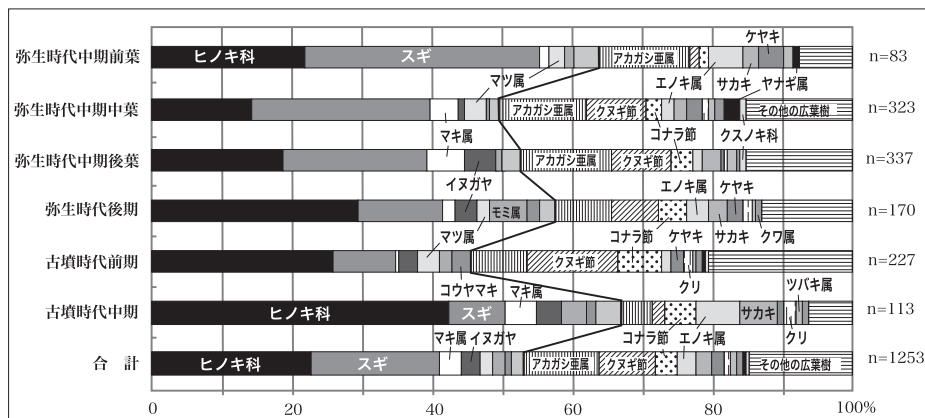


図4 愛知県朝日遺跡出土木製品の時期別 樹種組成変遷グラフ (文献1を改変)

手しやすい台地や丘陵の縁辺から2〜3キロ以内の距離で、なおかつ水稻耕作が容易な沖積平野の微高地上に集落を構えた。ただし日本列島を見渡すと、いくつか例外となる地域がある。そのうちのひとつが濃尾平野である。現在の濃尾平野は東西約30キロ、南北約40キロの広大な沖積平野だが、弥生時代前期の海岸線は木曾三川の河川活動によって陸地化が進んだ現在の海岸線より20キロほど内陸に位置し、

その南には干潟が広がっていた。朝日遺跡は、この濃尾平野の南東部に位置する東日本最大の弥生時代集落である。弥生時代前期(紀元前6〜5世紀頃)から人が住み始め、古墳時代中期(紀元5世紀頃)まで継続する。その立地はかつての海岸線に近い(図3)。濃尾平野は縄文時代後期まで木曾川の河川活動が活発であったため、日本海側の沖積平野のようにスギなどの大径木が育つだけの時間的・

空間的余裕がなかった。そのため、朝日遺跡では弥生時代中期前葉(紀元前4世紀頃)からマツ属やヤナギ属を一定数用いている(図4)。花粉や大型植物遺存体の分析結果からも、濃尾平野低地に人が定着し始めた頃は草本類が主体で、そこにマツ属やヤナギ属などがまばらに生えるような植生であつたらしい(2)。しかし、そのように貧相な植生のみでは、1000年近く同じ場所に巨大集落を営み続け

ることではない。恐らく日々の燃料材や堅穴建物の建築材などに用いるクスギ節・コナラ節・マキ属などの中・小径木を主体とする林（里山的な植生）を人為的に集落の周辺に創り出し、定期的に伐採することで、萌芽更新により長期的にこれを維持していったと思われる。

「カシ類調達エリア」 濃尾平野東部の春日井台地上に位置する春日井市勝川遺跡では、アカガシ垂属の原木・分割材・鋳の未成品などが斧柄とともに多数出土しており、ここではアカガシ垂属を主体とする常緑広葉樹の伐採・分割・加工が一貫して行われていた（3）。この勝川遺跡が立地する尾張東部の春日井台地から北西方向にかけての丘陵部は、半径20キロほどの円弧を描いて濃尾平野低地部を囲んでいる。この半径20^キの円弧のエリアがアカガシ垂属など常緑広葉樹の分割材を濃尾平野低地部に供給する「カシ類調達エリア」として機能していたらしい（図3）。

「木材經由エリア」 「カシ類調達エリア」と、濃尾平野低地部のアカガシ垂属大径木は自生しないが、その分割材を入手して木製品生産を行っていた「木材消費エリア」は直線距離で10^キ20^キ離れており、その中間には木曽川扇状地扇端部の主要河川（かつての木曽川の本流筋）ごとに複数の遺跡が展開する。これらの集落群は、丘陵・台地上の「カシ類調達エリア」の集落群と沖積低地の「木材消費エリア」を河川で繋ぎ、製材済みの木質資源を平野全域に行き渡らせる「木材經由エリア」として機能していたとみられる。

「針葉樹大径木調達エリア」 「カシ類調達エリア」の更に外縁部の山地には、スギ・ヒノキ科・コウヤマキ・モミ属など針葉樹大径木を調達するためのエリアがあったとみられる。朝日遺跡の樹種組成変遷グラフ（図4）のスギとヒノキ科の割合を見ると、弥生時代中期前葉から後葉まではスギが多いのに対し、弥生時代後期以降はヒノキ科が卓越するようになる。これは、濃尾平野周辺の山地の低地部寄りに自生していたスギの伐採が進行して枯渇したために、より奥地のヒノキ科へと伐採の対象が変わっていったためであろう。墓の木棺材であるコウヤマキや、楯に使うモミ属も、このエリアに群生していたと想定できる。

濃尾平野低地部では弥生時代前期に遡る木製品の出土は認められないが、前述のように木曽三川の河川活動が落ち着く縄文時代晩期からの時間の経過が短いため、沖積低地の植生は弥生時代前期以降、この地に定着した人々が人為的に里山的植生を創り出すまでは、基本的に草本類が主体であったとみられる。このような「針葉樹大径木調達エリア」・「カシ類調達エリア」・「木材經由エリア」・「木材消費エリア」という同心円状の集落間分業の始まりは、この地で

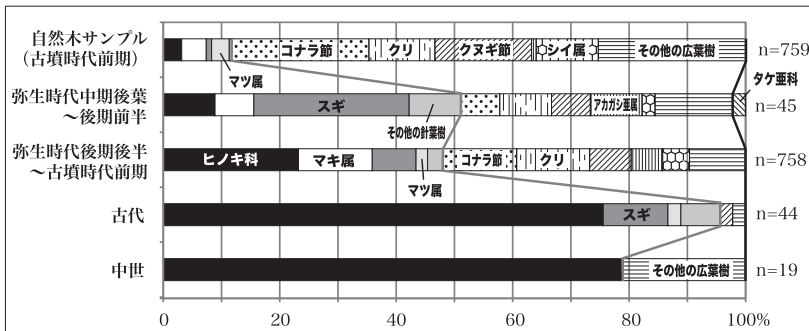


図5 愛知県 鹿乗川流域遺跡群出土木製品の時期別 樹種組成変遷グラフ（文献1を改変）

水稻耕作が開始された弥生時代前期にまでさかのぼる可能性が高い。

広葉樹から針葉樹へ木質資源外部依存体制の確立

次に、西三河の矢作川右岸に位置する愛知県安城市鹿乗川流域遺跡群から出土した木質資源の樹種組成を見つめる（図5）。

ここでは、弥生時代中期後葉～後期前半（紀元前1世紀～紀元1世紀頃）から中世に至る多量の木製品が見つかっている。これを時期ごとに見ていくと、時代が下るにつれてヒノキ科の使用が増えていき、特に古代・中世では全樹種のおよそ8割をヒノキ科が占めるに至る。

この遺跡群は碧海台地と呼ばれる台地に接しており、そこには木質資源が豊富にあった。その碧海台地上の自然植生に近いのが図5のグラフの最も上の自然木サンプル（遺跡から出土する木材のうち、ほとんど人為的な加工痕跡の認められない木片）である。これを見ると、コナラ節・クリ・クスギ節を主体とする二次林（里山）的植生であったことがわかる。

弥生時代中期後葉～後期前半と弥生時代後期後半～古墳時代前期（紀元2～4世紀

頃)の樹種組成もまたこれに近く、そこにスギとヒノキ科が若干加わる。すなわち、基本的には碧海台地の植生に頼りつつ、外部(矢作川上流か?)から針葉樹材を入手していたようだ。それが大きく変わるのが古代(8~9世紀頃)で、これ以降は周辺植生と関わりのない、完全に外部に依存した樹種組成となる。

同じことは、奈良県北東部の奈良盆地東辺地域についても言える。弥生時代には、磯城郡田原本町の唐古・鍵遺跡に代表されるように、奈良盆地の沖積低地に立地する集落の木製品は、基本的に集落周辺の木質資源で賄っていた。

しかし、古墳時代(特に中期)以降、掘削具には鉄製の刃先が装着されることによって木の損耗が無くなるためか、アカガシ亜属を用いた掘削具の出土量じたいが大きく減少する。更に、沖積低地の遺跡からは木製品の伐採・加工に用いる斧柄の出土例も少なくなる。

その結果、遺跡から出土する木製品全般における広葉樹の使用比率が著しく減少し、その大半をヒノキ科とコウヤマキが占めるようになる。ヒノキ科は主として武器・祭祀具・建築部材などに、コウヤマキは専ら古墳の木棺材に使用されていた。

これらヒノキ科とコウヤマキは濃尾平野低地部と同様、奈良盆地内には自生しておらず、必然的に外部地域に依存するようになる。

青柳泰介らの研究によると、奈良盆地東辺の山間部がこれらの木材の伐採・加工地だったようで、この山間部エリアの小盆地内に立地する遺跡からは、例外なく木材加工場の痕跡とみられるヒノキ科やコウヤマキなどの端材が大量に出土する(4)。

このことは古代~中世の様々な文書からも裏付けられ、奈良時代の『正倉院文書』には「山作所」として登場する。古墳時代初頭(紀元2~3世紀頃)に形成された奈良盆地東辺の山間部~木津川~奈良盆地という木質資源の流通ルートは、飛鳥時代後期の藤原宮、更には奈良時代の平城宮・京や大寺院の造営にそのまま引き継がれ、その後、中世に至るまで基本的に変わることはなかった(図5)。

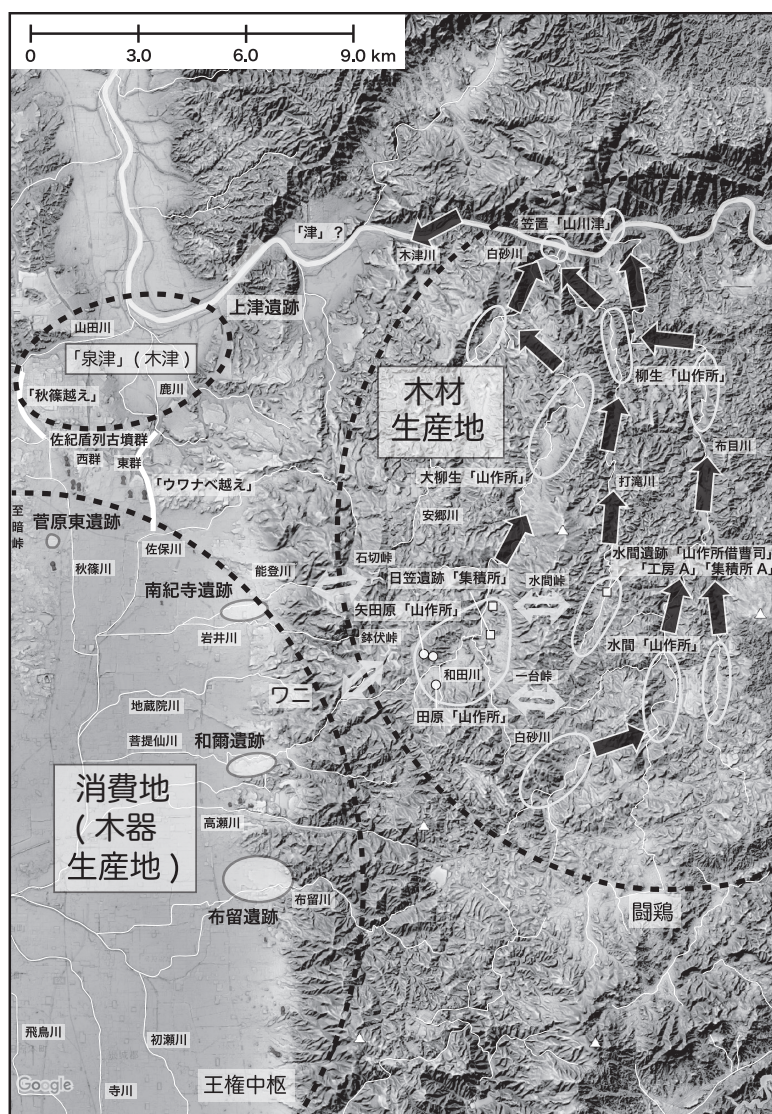


図6 奈良盆地東辺地域における木材生産地と消費地の関係 (S=1:200,000 文献4をスーパー地形にて改変)

《注》
図3.6の地図にはスーパー地形(https://www.kashimr3d.com/online/superdmap/)を用いた。

《引用文献》

- (1) 樋上 昇(2016)『樹木と暮らす古代人―木製品が語る弥生・古墳時代―歴史文化ライブラリー434 吉川弘文館
- (2) 愛知県埋蔵文化財センター(2007)『朝日遺跡Ⅶ』
- (3) 愛知県埋蔵文化財センター(1992)『勝川遺跡Ⅳ』
- (4) 青柳泰介・福田さよ子(2019)『大和の古墳時代木材生産地の様相―大和高原奈良市田原地区の木製残材の分析から―』鈴木裕明編『古墳時代王権中枢の木材利用に関する総合的研究』平成26~30年度科学研究費補助金基盤研究B 研究成果報告書